Memoirs of Beppu University, 52 (2011)

初期近代英語における ‘one the best（man)’型構文について

田　島　松　二

【要　　旨】

古英語に初出し、中英語で多少見られるものの十分に発達することなく、初期近代英語で消失したとされる最上級形容詞の強調表現‘one the best（man)’（= the very best（man)）型構文に関して、初期近代英語に関する研究状況とそこから得られた知見を紹介し、筆者の現時点での調査ではスペンサーとシェイクスピア以外には用例が確認できないことを報告したものである。

【キーワード】

初期近代英語、数詞 *one*、最上級形容詞、強調表現、‘one the best man’型構文

I

主として中英語（ME）に見られるが、今日の英語では全く消失してしまった最上級形容詞の強調表現に、数詞 *one* を使った形式がある。「the＋最上級形容詞（＋単数名詞)」に *one* が前置された構造で、例えば‘one the best’、名詞を従えれば‘one the best man’である。意味的には、今日の‘the very best（man)’とか、‘by far the best（man)’などに相当する。時に *one* の位置に *two*, *thre*e といった複数の数詞が用いられることもあり、その場合後続の名詞は複数形、つまり‘two(three, …)the best(men)’である。（複数数詞型については、‘the two（three, …）best（men)’の単なる変異形とする見方もある。）歴史的には古英語期（OE）に初出し，17世紀前半に廃れたとされる語法である。

この特異な構文に関する研究は早くも19世紀後半から見られるが、本格的なものと言えば、ゲルマン諸語をも視野に入れてその起源や意味を考察した Mustanoja（1958 &1960)、更にはこれを実証的に補完した Rissanen（1967）に尽きるであろう。前者のおかげでその起源と意味はほぼ解明され、後者により古英語（OE）と初期中英語（Early ME）における使用状況も明らかになっている。膨大な第一次資料が残存する中英語（ME)，とりわけ後期中英語（Late ME）に関しては、「規則的」とか、「(かなり）一般的」とか、「しばしば見られる」といった記述は見られるが、実際にどの程度そうであったのかは詳らかでなかった。その実証の不備を補うべく、筆者（田島 2011）は中英語全体、とりわけ、後期中英語（1300－1500）における当該構文の生起

状況を、文体や方言等にもふれながら，明らかにした。現代英語では完全に姿を消してしまったこの語法の史的消長を解明する上で、唯一残る課題は、廃用に帰した時代と考えられる初期近代英語（Early Modern English）の実証的研究である。という訳で、筆者は、現在、初期近代英語の用例収集を進めているが、その準備作業として、小論では先行研究の指摘するところを整理し、現時点での調査結果を報告しておきたいと思う。[1)]

Ⅱ

この‘one the best man’型構文に最初に注目したのは *A Shakespearean Grammar* で有名な Abbott（1870, §18）であると言われている。今から130年も前のことである。その Abbott は、最上級形容詞と共に用いられる *one* は‘above all’か‘alone, i.e. all-one’の意であるとし、シェイクスピア（William Shakespeare, 1564－1616）から以下の３例を引用している。

(1) *Cymbeline,* I.vi. 165－7 and he is one The truest manner'd, such a holy witch That he enchants societies into him;
(2) *Henry VIII,* II.iv. 47－50 Ferdinand, My father, King of Spain was reckon'd one The wisest prince that there had reign'd by many A year before.
(3) *Henry VIII,* II.iv. 153－55 I . . . Have to you, . . . spake one the least word that might Be to the prejudice of her present state, . . .

最初の例(1)は1609－10年に執筆された『シンベリン』に、次の(2), (3)の２例は1613年初演の『ヘンリー８世』に見られるものであるが、印刷本としての初出はいずれも1623年刊行の二折り本である。従って17世紀初頭の例ということになる。改めてシェイクスピアの全作品を調査してもこの３例しか確認できない。まさに Abbott の指摘通りである。*one* の位置に複数の数詞を用いた構文も全く見られない。現今の刊本テキストは Riverside 版、Arden 版等ほとんどすべてこの構文にふれ、*one* を最上級の強意語と解し、‘above all（others）. . .’, ‘the very wisest’, ‘the very least’などと注釈し、かつ Abbott（§18）参照、と注記しているものもある。[2)] この点、チョーサー学者の注釈に今なお散見される‘one（who is）the best man’といった同格構文的解釈や、‘one of the best men’といった部分属格的解釈といった旧態依然たる解釈とは無縁である。さすが、Abbott 以来の伝統と言うべきか。

シェイクスピアより時代は少し遡るが、古風な統語法を好むことで知られるスペンサー（Edmund Spenser, 1552－1599）も，この構文を用いたことは Sugden（1936, pp. 45－46）が夙に指摘するところであり、*Faerie Queene*（I–III [1590]; IV–VII [1596]）から次の４例（*one* ２例, *two* １例, *three* １例）を記録している。

(4) I.iii. 37 For he is one the truest knight aliue, . . .
(5) I.vii. 8 . . . his stature did exceed The hight of three the tallest sonnes of mortall seed.
(6) II.iii. 15 For they be two the prowest knights on ground, And oft approu'd in many hard

[1)] 先行研究の紹介は、荒木・宇賀治（1984, pp. 334－35）でも試みられている。そこでは *one* の位置に不定詞の *any* や *some* を用いた例も挙げられている。
[2)] シェイクスピアの諸版本の照合では、鹿児島大学法文学部の大和高行准教授にお世話になった。記して謝意を表する。

assay, . . .

(7) VI.xi. 24－5 They left her so, in charge of one the best Of many worst, . . .

上記４例以外に、筆者は複数数詞型をもう１例確認している。次例がそれである。

(8) II.ix. 47 Therein were diuers roomes, and diuerse stages, But three the chiefest, and of greatest power . . .

Faerie Queene の Books I−III は1590年、Books IV−VII は1596年の刊行であるから、上例(4), (5), (6)と(8)は1590年の、(7)は1596年の用例ということになる。

‘one the best man’型について、先行研究で指摘されている初期近代英語の用例はスペンサーの２例とシェイクスピアの３例のみである。いずれも1600年前後の例ばかりである。筆者も折にふれ調査を続けているが、現時点では新たな用例の発見に至っていない。例えば、16世紀初頭のスケルトン（John Skelton, 1460？－1529), 後半に入ってシドニー（Sir Philip Sidney, 1554－1586)、シェイクスピアとほぼ同時代のマーロウ（Christopher Marlowe, 1564－1593)、ジョンソン（Ben Jonson, 1572－1637), ダン（John Donne, 1572－1631)、ミドルトン（Thomas Middleton, 1580－1627）などには全く見られない。

複数数詞型については Hinckley (1918−19, p. 47) が1640年の例 (two the most elegant of them) と1704年の例（two the most agreeable sweets in the liberties of an English subject）を記録している。しかし、現時点で最後の例は Mustanoja (1958, p. 15) に引用されている E. Einenkel (*Historische Syntax* ［1916］, p. 178）が指摘した18世紀後半の次例である。

Thomas Warton's *History of English Poetry* (1774－81): three the most considerable schools.

Ⅲ

以上、古英語に初出し、中英語、それも後期中英語で多少見られるものの十分に発達することなく、初期近代英語で消失した最上級形容詞の強調形式‘one the best man’（＝ the very best man）型構文に関して、初期近代英語に関する研究状況とそこから得られた知見を紹介した。何よりも、近代英語における当該構文の実証的研究の不足、不備は明らかである。現時点で用例が確認されているのはスペンサーとシェイクスピアだけである。ただし、複数数詞型は18世紀後半の例が確認されている。では、数詞 *one* が強意語として「the＋最上級形容詞（＋単数名詞)」に前置された‘one the best（man)’型構文は、果たして劇作家シェイクスピアが記録に残る最後の使用者なのであろうか。シェイクスピアを最後に廃用に帰したのであろうか。更なる研究の進展が俟たれるところである。

参考文献

第一次資料：

The Riverside Shakespeare, Second Edition, ed. G. Blakemore Evans. Boston: Houghton Mifflin, 1997.

Spenser's ‘Faerie Queene’, 2 vols., ed. J. C. Smith. Oxford: Clarendon Press, 1909.

＊ ＊ ＊

John Skelton: The Complete English Poems (Penguin classics), ed. John Scattergood. Harmondsworth: Penguin, 1983.

Sir Philip Sidney: The Major Works (Oxford World's Classics), ed. Katherine Duncan-Jones. Oxford: Oxford University Press, 1989.

The Complete Works of Christopher Marlowe, ed. Fredson Bowers. Cambridge: Cambridge University Press, 1973.

Ben Jonson: Volpone, or The Fox; Epicene, or The Silent Woman; The Alchemist; Bartholomew Fair (Oxford World's Classics), ed. Gordon Campbell. Oxford: Oxford University Press, 1998.

The Complete English Poems of John Donne (Everyman's Library), ed. C. A. Patrides. London: Dent, 1985.

Thomas Middleton: A Chaste Maid in Cheapside; Women Beware Women; The Changeling; A Game at Chess (Oxford World's Classics), ed. Richard Dutton. Oxford: Oxford University Press, 1999.

第二次資料：

Abbott, E. A. 1870. *A Shakespearian Grammar,* 3rd ed. London: Macmillan.

Hinckley, H. B. 1918－19. "Chauceriana". *Modern Philology* 16. 39－48.

Mustanoja. T. F. 1958. *The English Syntactical Type 'One the Best Man' and its Occurrence in Other Germanic Languages*. (Mémoires de la Société Néophilologique de Helsinki, 20: 5.) Helsinki: Société Néophilologique.

——. 1960. *A Middle English Syntax, I*. (Mémoires de la Société Néophilologique de Helsinki, 23.) Helsinki: Société Néophilologique.

Rissanen, Matti. 1967. *The Uses of 'One' in Old and Early Middle English.* (Mémoires de la Société Néophilologique de Helsinki, 31.) Helsinki: Société Néophilologique.

Sugden, H. W. 1936. *The Grammar of Spenser's Faerie Queene.* Philadelphia: Linguistic Society of America.

荒木一雄・宇賀治正朋. 1984.『英語史 IIIA』大修館書店.

田島松二. 2011.「中英語における 'one the best (man)' 型構文」*The Kyushu Review* 13, 75－98.